

### <あこのころの「誌要」>煙霧の彼方のこと： 「日本文学誌要」と「そとぼり通信」の回顧

立石, 伯

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

100

(開始ページ / Start Page)

7

(終了ページ / End Page)

9

(発行年 / Year)

2019-07-27

〈あのころの「誌要」〉

## 煙霧の彼方のこと

——「日本文学誌要」と

「そとほり通信」の回顧——

立石 伯

かれこれ四十年近く以前になるのであるうか。わたしが文学部日本文学科の教員に就任した一九七八年の翌年頃に学科としてなすべきこととして検討・構想された一つの課題があった。国文学会の再建と「日本文学誌要」（以下「誌要」と表記）の刊行についてである。記憶が定かではないが、「誌要」が通巻の号数の第二三号として再刊されたのが一九八〇年二月になっているから、その年月を逆算しているにすぎない。もとより、活動が停止していた間に逝去された教員たちの追悼号などの刊行も求められていたはずである。

一九六一年に日文科に入学した当初から、わたしの意識のなかには国文学会や学会の雑誌ということがまったく除外されていた。あの頃は六〇年第一次安保闘争の現実的・

思想的な後始末を自分なりにどのようにすべきか考え、悩んでいた頃であったと思う。したがって、教師に就任した年から、文字通り罪障消滅を願うごとくに、学生・学科・学部・大学のことなどに目をむけていこうとしていたのであった。

学会の再建や学会誌の刊行にあたっては、名称などをふくめて一定の目的や構想が必須のものであるうか。法文学部国文科を日本文学科と改称し、「国文学誌要」を「日本文学誌要」に改名したにもかかわらず、「国文学会」名称が残っていて、検討の対象の一つだったのでないか。ともあれ、主に検討されたのは、学会再建・「誌要」再刊の意味や意義や役割などについてである。つまり、日本文学、言語学、中国文学、その他学際的対象における教育・研究のあり方、研究対象や方法論の探求などが議論されたはずである。その議論の内容の詳細についてはほぼ忘れていたのでここで触れない。杉本圭三郎（以下敬称略）が「誌要」第二三号の編集後記にあたる「発行にあたって」で的確に記している。また、つぎに触れる「そとほり通信」についてもやはり杉本圭三郎が第1号（八四年四月創刊）の『国文学会ニュース』の来歴」で説明しているので、刊行にいたる経緯のあれこれを思いだすことができる。

ところで、大学の学科としてそれぞれ個性的な龐大な卒業生に対してどのようなかたちで帰属意識を高めることができるか、また大学・学問動向などの有益な情報を提示で

きるか、求められていた。したがって、その目的になかった小冊子の発行などは可能か否かということについても検討がすすめられた。基本的な観点として、卒業後の活動や就職先のあり方を斟酌してみると、かならずしも学術・研究論文や文学的評論などに関心を寄せている日文卒業生ばかりではないであろうという点を確認できた。そういう人たちにとっては、現在の出来事などにかかわる話題、またいわゆる日常茶飯事的な情報や同窓生や教員などの消息や近況などについて共有することも望まれていたであろう。それらの要求に応えるべく時期的にはおくれたのであるが、「そとほり通信」の発行へとつながっていた。

学会誌の大雑把な考え方の一つは、第二三号の目次を見れば明らかにさう。学術論文、文学評論として対外的にも高く評価されうる水準を保つ論文を発表していかなければならない。小田切秀雄、益田勝実、岩崎武夫、杉本圭三郎などの論文が掲載されている所以である。高い水準維持が毎号要請されているのはあえて断るまでもない。一方で、学生の表現・研究意欲を鼓舞するために優秀な卒業論文、また学部在学生の斬新な論文の掲載などにも留意した。すこし遅れて第二五号（八一年二月刊）に卒業論文小特集として五本の論文が採録され、さらに在学生の論文ものちの号に幾本か掲載されることになった。

それとともに、ロックアウトのつづいた六〇年代末頃からの大学闘争をへて、長い空白のある国文学会としての活

動を歴史的に概観する記事も必要であった。また、公式な大学史に日本文学科の歴史が正確に把握されていない点があり、総括的に把握し直すため四回にわたって対談・鼎談、座談会などを掲載した。第一回目は、第二五号のインタビュー「小田切秀雄先生に聞く」であった。三〇数ページを費やして大学・学部・学科のこと、当時の文学状況や社会思想、研究方法論などじつに多様で興味深い話が語られた。「編集部」として対応したのは、この間の再建を中心のようになった杉本圭三郎や編集長になってもらった俳人の鈴木和雄やわたしなどであったはずである。

第二回目（第二六号八二年七月刊）は座談会「草創期のころ―法政大学国文学会の足跡（2）―」である。藤田初巳（一九二八年卒）、鈴木和雄（三二年卒）、小野田伊市（三四年卒）の三人に安藤信廣とわたし聞いていた。この方たちは国文学会が組織されるまえの戦前・戦中の卒業生で、藤田初巳は入学時期は大正末で、三回卒であった。法政騒動と称される出来事やその当時の大学や学科などの教員・学生たちの雰囲気や社会的な動向などを語ってもらった。

第三回目（第二七号八二年二月刊）は座談会「日本文学科の戦後」で、正木信一（四五年九月卒）、川村幸次郎（四九年卒）、鈴木敬司（五二年卒）の三人で、鈴木和雄、杉本圭三郎、わたしが聞いていた。戦中・戦後の混乱期・激動期の現実・大学状況、学制改革や本学の大学改革などの様態である。

第四回目（第二八号八三年七月刊）は座談会「昭和三十年代の活動」で、杉本圭三郎（五六年卒）、片桐登（六一年卒）、米山賢司（六三年卒）、西野春雄（六六年卒）の四人で、わたしが聞いていた。この回は現役の教員が三人おり、話題は多方面におよんだ。大学学部・学科のこと、当時の学会活動のあり方や方向性、国文学会や学術雑誌・同人誌の様子、時代状況、安保闘争や大学紛争などにまで話がひろがっていた。

さて、ここまで書いたものを読みかえして、思う。「誌要」の再刊、「そとほり通信」の創刊など、当時はある転換期であったはずだが、その雰囲気が出ていないのではないかと。

（たていし はく・本学名誉教授）